新見公立短期大学紀要　第29巻
二四七～二六一頁、二〇〇八年

論稿

沖縄・与那国島の鬼虎伝説

原田信之
（日本文学）

鬼虎は、第二尚氏王統第三代尚真王（一四七七～一五二六在位）の時代に活躍したとされる八重山諸島与那国島の首長であった。石垣島のオヤケ・アカハチと同様に、与那国島の鬼虎は琉球王に命じられた仲宗根豊見親らによって討伐された十六世紀に実在した人物である。与那国島には、鬼虎が琉球王に命じられた仲宗根豊見親らによって討伐された話が伝承されている。鬼虎には娘がいたとされ、鬼虎が征伐された時に捕らえられて宮古島に連れて行かれ、自害したという。鬼虎征伐に関しては「忠導氏家譜」の記述や「仲宗根豊見親八重山入の時（の）アヤゴ」、鬼虎の娘に関しては「鬼虎の娘のアヤゴ」などが伝えられている。鬼虎にまつわる伝説は、琉球王朝の先島諸島統治をめぐる問題や南西諸島における英雄伝説の問題等を考える際にも重要なてがかりを与えてくれるものと考えられる。

（キーワード……鬼虎、鬼虎の娘、与那国島、仲宗根豊見親、アヤゴ）

はじめに

『中山世鑑』（一六五〇年成立）・『中山世譜』（一七二五年成立）・『球陽』（一七四五年初回編集）等の琉球の正史によれば、琉球の歴代王統は、神話時代にあたる天孫氏時代を除外すると、舜天王統（一一八七～一二五九）以降、英祖王統（一二六〇～一三四九）、察度王統（一三五〇～一四〇五）、第一尚氏王統（一四〇六～一四六九）、第二尚氏王統（一四七〇～一八七九）と続いた。この琉球の歴代王統を日本本土の歴史と対照させると、舜天王統から第二尚氏王統前期まではほぼ日本の中世に相当し、第二尚氏王統後期は日本本土の近世に相当する。これらの王統のうち、本稿では、第二尚氏王統第三代尚真王（一四七七～一五二六在位）の時代に活躍したとされる八重山諸島与那国島の首長であった鬼虎（おにとら。土地ではウニトラと呼称）という人物をめぐる伝説を中心として扱う。民間伝承の世界における英雄たちの有様は実に生き生きとしており、聞く者の心をとらえてやまない。文献資料からはうかがえない生々しい英雄たちの活躍の有様から、我々は、多くのことを学ぶことができる。これらの民間伝承資料は、史実と虚構の間にあり、資料的位置づけが極めて難しいため歴史的資料とみなすことはできないが、これらの民間伝承の背後には何らかの意味が隠されている可能性がある。しかし、これらの民間伝承は、いずれ消え去る運命にある。採集不可能となる前に、現時点での残存資料の総まとめ

をしておく必要があろう。

宮古・八重山諸島は、一三九〇年（明・洪武二十三年、日本・元中七年）に中山王察度に入貢してから一六〇九年（慶長十四年）の島津の琉球侵入まで琉球王国の統治下にあったとされる。この中山王察度への入貢に関しては、『中山世鑑』察度王の項に「洪武二十三年（一三九〇）庚午、南夷、宮古嶋・八重山嶋、重訳、始来貢ス」[1]とあり、『中山世譜』洪武二十三年の項にも「本年。宮古・八重山。始来称」臣、納」貢于中山。」[2]と同様の記述がある。また、『球陽』巻之一にも察度王の四十一年（一三九〇）に宮古八重山が初めて来朝入貢したと記されている。これらの記述から、宮古・八重山諸島が中山王察度に入貢したのは一三九〇年とみられるわけであるが、『球陽』巻之一によれば、その時入貢したのは宮古の与那覇勢頭豊見親であったという。[3]

日本最西端に位置する与那国島（よなぐにじま。土地ではドゥナンと呼称）は、東西約十一キロ・南北約四キロ・面積約二十九平方キロの東西に長い島である。与那国島の西方約百十キロに台湾島があり、年に数回気象条件の良い時に台湾島が見えることがあるという。一島で与那国町を構成しており、現在は祖納・久部良・比川の三集落がある。

鬼虎は、第二尚氏王統第三代尚真王（一四七七～一五二六在位）の時代に活躍したとされる八重山諸島与那国島の首長であったが、琉球王に命じられた仲宗根豊見親らによって討伐されたという。与那国島には、鬼虎が琉球王に命じられた仲宗根豊見親らによって討伐された話が伝承されている。また、鬼虎には娘がいたとされ、鬼虎が征伐された時に捕らえられて宮古島に連れて行かれ、自害したという。鬼虎にまつわる諸伝説は、琉球王朝の先島諸島統治をめぐる問題や南西諸島における英雄伝説の問題等を考える際にも重要なてがかりを与えてくれる。

本稿は、新たに採集した口承資料や、「忠導氏家譜」、古謡「アヤゴ」などの関連資料の検討を通して、与那国島の首長であったという鬼虎や鬼虎の娘をめぐる伝説の全体像をまとめ、残存資料の少ない琉球王朝関連伝説の一側面を考察することを目的とする。[4]

Ⅰ　与那国島の鬼虎伝説

尚真王が八重山征伐を命じたのは明の弘治十三年庚申（一五〇〇）二月のことであった（『中山世譜』巻六）。その時に征伐されたのは石垣島のオヤケ・アカハチで、『球陽』では三年間年貢を拒否したことが征伐の原因とされている。[5]この時、琉球王府は「大小戦船四十六隻」に「士卒三千余人」という大軍勢でオヤケ・アカハチを攻め滅ぼしている（『球陽』尚真王二十四年の項）。この時に宮古島の首長仲宗根豊見親らが戦功をたてたわけであるが、オヤケ・アカハチの乱の後、仲宗根豊見親らは与那国島の首長鬼虎を征伐したとされている。

では、現在の与那国島では鬼虎についてどのように語られているかを具体的にみてみることにする。

〈事例1〉「買ってこられた鬼虎」

サカイ・イソバの後かなこれは。これあんた宮古の人間だってよ。向こうは、子どもだけ生まされるわけさな。で、向こうはもう、間に合わないわけさ。で、与那国の人が、

「じゃ自分が買っていこう」って、買って来て、養ったっていう話はある。

大きかったって、子どもの時から。よう食べている。間に合わないわけさな。でも宮古にはお米はないでしょ。与那国は豊富であるわけ。そういう関係で、とは言われてる。

（鬼虎が殺された場所の）話は、田原（たばる）、アチタバルって言って、田原でやられたみたいだけど。田原は、祖納（そない）部落。[6]

〈事例2〉「鬼虎征伐」

この人は、宮古から、お米の白米の、七斗かなあ、七斗で買って来たらしい。安い、雇い人として、お金じゃなくてお米にね。買って来たんだけど、その子が、使ってるからどんどんどんどん大きくなり豪傑なって、手に負えない人に

なったと。して後は、奉納の税も、反抗して納めないと。自分が連れて来たっていっても。オヤケ・アカハチみたいにもう、なったんでしょうなあ。これそのまま置くとやっぱり、税金、取れないから、

「こりゃいかん」って、王様が、征伐された。殺されたとこ向こうの方に残ってるけど。それでまあ、ツカサ（司）とか、そういう人を使って、お酒を飲まして、討ったとか。首は、一斗樽（いっとだる）か二斗樽かに、頭入れたら、一個しか入らなかったって。それを塩漬けにして持って帰ったと。目印に。そういう話。子どもや、女の子もおったけど、悪者の子っていうことで、自殺した。

鬼虎というのは、鬼というのは悪いということが鬼だからね。虎というのはもっと怖いでしょう。悪（わる）だけやっとったという、字を書いているでしょ。静かな人間じゃなかったと。元々は、ここの人じゃなく、宮古の人だった。宮古から雇い入れ、お米で買って来た。連れて来てくれた人が手に負えないで、暴れん坊になったわけ。鬼虎というのは与那国の人ではないから、悪者にされるわけ。悪者扱いされる。言うこと聞かないわけよ。あの石垣のオヤケ・アカハチというのも、そう。島の人じゃないから。

（父母などと）そういうの、そういう話もしながら、そういうの、そういう人もおったようって。テレビのない時代で育ったから、これが一つの娯楽みたいなもので。教えられたことがある。

（鬼虎が殺されたのは）祖納の部落ではあるけど、当時は今の公民館みたいにあっちの居場所がやっぱりあって。神社みたいなところさね。何かあるとそこで集まって。近隣の人が。そこに、ノロとかツカサとか、若いのがいるわけだ。そういうのを使って、毒殺をしたっていう説もあるし、お酒を飲まして、弱ったところを切ったとか、書き方があるけど。そういうものを、聞きながら。鬼虎は、サカイ・イソバよりちょっと後だから。[7]

〈事例1〉〈事例2〉は筆者が与那国島で採集したものである。〈事例1〉では鬼虎が宮古島から買ってこられたことと、鬼虎が殺された場所は祖納集落のアチタバルという地であることが語られている。〈事例2〉では鬼虎が宮古島から買ってこられたことと、反抗して税金を納めなかったため王に征伐されたこと、ツカサ（司）を使って酒を飲ませて討ったこと、一斗樽か二斗樽かに一個しか入らなかったという鬼虎の大きな首を塩漬けにして持って帰ったことなどが語られている。なお、〈事例1〉〈事例2〉の話者がともに鬼虎はサカイ・イソバの後かと語っているが、サカイ・イソバ（またはサンアイ・イソバ）は、鬼虎以前に与那国島を統治していたとされる女性の首長である。与那国島では、鬼虎の伝説はあまり語られていないが、サカイ・イソバ（サンアイ・イソバ）にまつわる伝説については濃密に伝承されている。[8]

では次に、鬼虎の最期について、与那国島ではどう語られているかをみてみることにする。

〈事例3〉「鬼虎の最期」

この鬼虎という方はですね、宮古と与那国が交易してるあいだに、貿易してるあいだに、宮古で非常にあの、宮古て島は米のとれる島じゃないんですね、田んぼの少ないところで。お米を仕入れた時に、あそこの方から、この子はもらって来たんだっていう、ほういった言い伝えがありますけれどね。そしてこれが、だんだん成長して、島の酋長になったんだって。これは確かにあの仲宗根豊見親（なかそねとうみや）がこれを殺してるんですよ、鬼虎を。

鬼虎とこれ（イソバ）との年代が私ははっきりしないですけどね。あの時は、サンアイ・イソバはいらっしゃらないわけですよ。鬼虎を、仲宗根豊見親が殺しに来た時はですね、サカイ・イソバはその以前なのか後であるか、はっきりしないんですけど年代は。何だか再々、この物語では、外部からこの島にはもう、上がってるようですけどねえ、みんなもう。それから打ち殺されたとか色んなことがあるんですけれど。鬼虎征伐なども、サカイ・イソバ征伐は首里の王朝からはされてないですけど、鬼虎の場合は仲宗根豊見親に、首里の王朝からの命で、来てるんですよね。そして、あの人が殺されたのはどのあたりだということなんかも、はっきりしてますけどね。この部落の一番最初の発祥の地が、この部落の一番端っこのところなんです。前の方の。あのあたりで、会談

をしながら、自分で宴会を設けて。それからあのう、ちょっと過ぎると、湿地帯があったんだけれども、改善して非常に奇麗な田んぼになってますけどね。そこらあたりが沼地で。そこがまあ、言い伝えで。（そこの地名は）アンガイハマティですね。東の浜ということを表現してますけどね。アンガイハマティ。浜は砂浜の浜ですけどね、ティは小さいということを表現してます。そしてこの人の亡くなったのはですね、沼地でアチタブルというところで命を落とされたということですね。水たまりのこと表現してますけれど、小川のことを言ってるんじゃないかなと思います。

あの当時はですね、よくあの、ノロですか、ノロの指示に従って、行動したようですね。ノロによってですね。このノロからの指示でないですかね、仲宗根豊見親さんは。酒を、持って来てますよ。そして、この宴会してるんですけれど、自分の飲んでる酒と、鬼虎にノロなどがついであげてる酒と全然別なんですよね。そして、この鬼虎にあげておった酒には、度数がきつかったかそれとも毒が入っておったかしらんけど、もうへとへとになるぐらい酒を飲まされて、後で、命を、されたっていうことですね。

鬼虎の一家っていうのは、わからないですね。その本人だけの物語はよく、聞きますけれど、家族的なことについては、あまり聞きません。

（鬼虎は）非常に大きかったようですね。非常にあの、豪傑だったということを、よく、言ったり聞いたりしてますね。普通並の人でなくて、優れた身体をしておったようです。[9]

〈事例3〉は最初に鬼虎が宮古島から買ってこられたこと、成長して与那国の酋長になったこと、ノロ（祝女・巫女）に酒を飲まされて殺されたことなどについて、鬼虎の最期の状況を中心に語られている。〈事例3〉で特に興味深いのは、仲宗根豊見親玄雅らと鬼虎がアンガイハマティという地名の所で会談をしながら宴会をし、その後、アチタブルという地名の所で殺害されたという部分である。〈事例1〉の話者も語っているように、与那国島では鬼虎がアンガイハマティで宴会をしてアチタブルで殺されたことはよく知られており、調査中複数の話者から同様の話を聞くことができた。そして、鬼虎が飲まされた酒については、毒入りであったという語りと、鬼虎だけ特に強い酒を飲ませたという語りがあった。アンガイハマティ（「アンガイ」は東、「ハマティ」は小さい浜の意。昔は砂浜で、船着き場であったという）やアチタブルティ（川の名。「アチ」は熱い意。水が少なく、太陽の加減で暖かかったという）は祖納集落の南方にある地名で、現在は土地改良によって田んぼになっているが、かつては湿地帯であったという。[10]

宮古島や多良間島で鬼虎についての聞き取り調査をすると、鬼虎は与那国島では神様のようにあがめられているそうだ、という語りをよく聞く。ところが、実際に与那国島で調査すると、鬼虎に関する関心は極めて薄く、神様のようにあがめられているということは全くなかった。また、与那国島には鬼虎を祀る拝所もなく、ただ、鬼虎はアンガイハマティで宴会をしてアチタブルで殺されたらしいという話を聞くことができるのみであった。これは、琉球王府に征伐されたオヤケ・アカハチも同様で、筆者の調査した範囲では、アカハチの出身地とされる波照間島にも、アカハチの活動の拠点となった石垣島にもアカハチを祀る古い拝所は確認できなかった。おそらく、琉球王府に征伐された逆賊として、拝所をつくることさえ禁じられたためかと推定される。

また、琉球王府に征伐された逆賊であることに加え、鬼虎が宮古島出身で与那国島とは関係が薄く、鬼虎の娘も捕らえられて宮古島で死去して子孫もいないことも、与那国島で鬼虎に関する関心が薄い原因となっているのであろう。

Ⅱ　鬼虎伝説と忠導氏家譜

石垣島のオヤケ・アカハチの乱に関しては正史に詳しい記述があるが、与那国島の首長鬼虎を征伐したことに関しては、『中山世鑑』・『中山世譜』・『球陽』等の琉球の正史に記述がない。そのため、鬼虎の乱に関しては、仲宗根豊見親玄雅を元祖とする歴代の系譜が記された「忠導氏系図家譜正統」（以下「忠

導氏家譜」と略す）にある記述を中心にして考察が加えられてきた。

「忠導氏家譜」では、冒頭に高祖目黒盛豊見親から元祖仲宗根豊見親玄雅に至る系譜を簡略に記した文章があり、その文の次に「乾隆二十二年丁丑十月吉日　狩俣親雲上玄賢謹記之」[11]と記されている。また、「忠導氏家譜」の最後は清の同治九年（日本・明治三年、一八七〇）生まれの十六世玄綱の世代で終わっている。このことから、この「忠導氏家譜」は元祖の仲宗根豊見親玄雅から十代目の子孫「玄賢」が清の「乾隆二十二年」（一七五七）に作成し、その後明治三年生まれの十六世玄綱の代まで書き継がれてきたものであることがわかる。琉球の正史は、『中山世鑑』（一六五〇年成立）、『中山世譜』（一七二五年成立）、『球陽』（一七四五年初回編集）等であるが、「忠導氏家譜」が作成された「乾隆二十二年」（一七五七）は『球陽』の成立時期と近いということもあり、正史の間隙を埋める史料の一つとして重視されてきたようである。[12]

次に、「忠導氏家譜」の鬼虎征伐に関する部分を引用してみることとする。ただし、原文は漢文で読みにくいため、筆者が作成した釈文を示すことにした（釈文を作成する際、私意により句読点と送り仮名を補い、（　）内には現代仮名遣いによる漢字の読みや簡単な注を記入した。また、便宜的にＡＢＣＤ部分に分け、傍線を付した）。

「忠導氏家譜　正統／紀録／元祖玄雅仲宗根豊見親」の項。

A　嘉靖年間（明、一五二二～一五六六）、八重山島与那国の首長鬼虎、己の武勇を負（たの）み、王化に随はず。故に玄雅命を奉じ、追罰の時、聖上に殊に御剣治金丸を恩借し賜ふ。此に於て恩を謝して帰島し、当地の兵を率ひ、彼の地方に到る。逆徒を征罰し、凱歌を唱へ、入朝して御剣を返上す、云云。／

B　附録／鬼虎は、勇力無双にして、智謀衆を迢（こ）へ、身長一丈五寸（約三メートル一五センチ）なり。且（かつ）与那国島の形勢は、四方の巌石屏風を欹（そばだてる）が如く、周囲に隠れ干瀬有り。而して只南方に一の津口有り。風波静なる時、稍（ようやく）船出入することを得る也。若し一夫之を守れば、則ち万夫進むことを得ず。故に其の険所を憑（たの）み、遂に王化に随はず。此の鬼虎は、原来当地狩俣村の生産也。此の人五歳の頃、身長五尺（約一メートル五〇センチ）計（ばかり）有る也。其の頃当地に飢饉あり。時に与那国の人、海を渡りて当地にて商売す。鬼虎の形相凡夫ならざるを見て、之を異と為（な）し、将に米一斗（約一八リットル）を以て之を買ひ、而して帰島す。後に成人して一島の首長と為（な）る也云云。

C　弘治年間（明、一四八八～一五〇五）、八重山島退治の時、兵船を遣（や）りて之を攻め令（し）む。然に兵船津口に入ること能はず。而ば空しく帰帆する也。故に今玄雅に命じ、之を討た使（し）む。此の時の宗徒の勇士は、嫡子金盛豊見親、二男祭金豊見親、三男知利真良豊見親、金志川金盛、同人弟那喜大知――是の人後来金志川豊見親と称す――、精兵二十四人。其の外美女四人、平良祝（のろ）住屋大阿智城、祝（のろ）砂川恋種司、伊良部伊安登之於母婦、砂川阿斌娥摩、相ひ随ひて既に舟を艤（ぎ）して与那国島に到る。先の使ひとして美人等が入り、諸味麹を献じ、之を告げて曰はく「吾が宮古島、数（しばしば）飢饉に遭ふ。而して居民の過半に及びて憔悴す。故に貴地に投じ、飢寒の苦を免れんと欲す。而して遠く風波の難を凌ぎ、今日幸に大人（たいじん）の台顔（たいがん）を謁するを得。大人（たいじん）原（もと）宮古島の人也。願はくば故土の情を念じ、吾等の残生を救ひたまへ」と、涕泣（ていきゅう）して之を訟（うった）ふ。鬼虎、美人の巧言令色に惑はされ、酔に乗じて本船を入れ挽（ひ）か使む。時に鬼虎大に酔ひて隄防（ていぼう）せざる故（ゆえ）、玄雅兵を直（ただち）に率（ひきい）て攻め入る。鬼虎余丈の大角棒を振て迎戦すれども、其の勇当るべからず。玄雅将に之を避んと欲し、田疇（うね）を飛び超へ、忽然（こつぜん）として深田（ふかだ）に跌倒（てっとう）す。鬼虎大ひに笑ひて曰はく「汝等今日釜中の魚となる。奈何にして飛び出し得るか」。其の声未だ了（おわ）らざるに、左右より金盛兄弟、金

志川兄弟之を挟み、攻戦す。鬼虎当（まさ）に右に払ひ左に大喝一声す。其の威（い）猶（なお）迅雷（じんらい）のごとし。庶人（しょじん）愕然（がくぜん）として引き退く。時に玄雅田の中より躍り出で、御剣治金丸にて鬼虎の右の膝を薙ぎ落としたり。嫡子金盛走り寄り、首を取る。余賊悉く降参し、此に於て鬼虎の女子を捕へて帰島す、云云。当島の綾語今に存す。[13]

また、「忠導氏家譜」の「二世八重山豊見親玄数」の項には次のように記されている。

D　童名祭金。成化年間生、嘉靖年間卒。号義伯。／父玄雅。（略）／尚真王世代／弘治十三年庚申（明、一五〇〇）、八重山島大浜赤蜂退治の時、父玄雅に随ひて彼の地方に到り、逆徒を討ち治めて帰島す。因（よって）茲（ここに）命を奉じて八重山島守護となり、彼地に到り四年職を勤む。故に八重山豊見親と称す。嘉靖（明、一五二二～一五六六）の初め、八重山島の内与那国の酉（酉ヵ）長鬼虎謀叛の時、父玄雅に随ひて彼の地に到り、全て成功して帰島す、云云。[14]

「忠導氏家譜」のA部分には、嘉靖年間（明、一五二二～一五六六）に八重山地方与那国島の首長鬼虎が自らの武勇をたのんで王化に従おうとしなかったため、玄雅が命を奉じて追罰した。その時、王に御剣治金丸を借り、逆徒鬼虎を征伐し、入朝して御剣を返上したことが記されている。

BとCは「附録」と記された部分で、鬼虎征伐の顛末が詳細に記述されている。B部分は、鬼虎の出自と与那国島の地勢について記す内容となっている。鬼虎は勇力無双で衆人を超える知恵もあり、身長は一丈五寸（約三メートル一五センチ）もあった。与那国島の地勢は、四方を岩壁が屏風を立てたように囲み、南方に一ヵ所だけ港があり、風波が静かな時にようやく船の出入ができる。もし一人がこの港を守れば、誰も進むことができない。そこで、その険所をたのんで王化に従わなかった。鬼虎は、元は当地宮古島狩俣村の生まれで、五歳の頃には身長が五尺（約一メートル五〇センチ）ばかりあった。その頃宮古島に飢饉があり、与那国島の人が海を渡って商売に来て、鬼虎の非凡な形相を見て米一斗（約一八リットル）で買って帰った。鬼虎は後に成人して与那国島の首長となった、などと記されている。

C部分は鬼虎を征伐した時の様子について記す内容となっている。弘治年間（明、一四八八～一五〇五）の八重山島退治の時、兵船を派遣して攻めさせたが、兵船は港に入ることができず、空しく帰帆した。そこで今玄雅に命じて討たせることにした。この時の勇士は、嫡子金盛豊見親、二男祭金豊見親、三男知利真良豊見親、金志川金盛（玄雅の庶子）、那喜大知（玄雅の庶子）ら精兵二十四人で、その他に平良祝（のろ）住屋大阿智城、祝（のろ）砂川恋種司、伊良部伊安登之於母婦、砂川阿斌娥摩ら美女四人が従い、与那国島に到着した。先の使いとして美人等が入り、酒を献じて「わが宮古島はしばしば飢饉に遭い、島民の過半が憔悴している。あなた様は元は宮古島の人ですから、どうか私たちを救ってください」と、泣きながら訴えた。鬼虎は美人の巧言令色に惑わされ、酔いに乗って本船を入港させた。その時鬼虎は大変酔っていて防がなかったので、玄雅は兵を率いて攻め入った。鬼虎は余丈の大角棒を振って戦った。玄雅は大角棒を避けようとして田の疇（うね）を飛び超えようとして深田（ふかだ）に倒れてしまった。鬼虎は大笑いして「お前らは釜の中の魚だ。どうやって飛び出せるのか」と言ったが、その声が終わる前に左右より金盛兄弟、金志川兄弟が鬼虎を挟み、戦った。鬼虎は右を払い左に大喝一声したので人々は驚いて引き退いた。その時玄雅が田の中より躍り出て、御剣治金丸で鬼虎の右の膝を薙ぎ落とした。嫡子金盛が走り寄って首を取った。残党らは悉く降参し、鬼虎の女子を捕えて帰島した。宮古島の綾語が今も残っている、などと記されている。

「二世八重山豊見親玄数」の項のD部分には、八重山征伐の時期について重要な記述がある。玄数（童名祭金）は成化年間に生まれ、嘉靖年間に亡くなった。弘治十三年庚申（明、一五〇〇）、八重山島大浜の赤蜂退治の時、父玄雅に従って彼の地に到り、逆徒を討ち治めて帰島した。それによって八重山島守護

を命じられ、彼地で四年職を勤めた。嘉靖（明、一五二二～一五六六）の初め、与那国島の酋長鬼虎が謀叛をおこした時、父玄雅に従って彼の地に到り、討伐に成功して帰島した、などと記されている。

これらの記述から、鬼虎征伐がどのように行われたのかということについて、かなり具体的に知ることができる。描写がかなり詳しく、目の前で戦闘が行われているような感じを抱かせる面白い文章となっている。「忠導氏家譜」の鬼虎征伐の記述は、祖先の活躍を残すため、かなり力を込めて作成された文章といえよう。

先にみたように、現在の与那国島の鬼虎伝承はかなり衰微しており、「忠導氏家譜」の鬼虎征伐の記述ほど詳しい内容の語りを聞くことができなかった。ただし、与那国島ではよく知られている鬼虎がアンガイハマティで宴会をしてアチタブルで殺されたことは「忠導氏家譜」には述べられていない。アンガイハマティやアチタブルの地名伝承は、文献を介さず代々与那国島で語り継がれてきたものと推測される。

Ⅲ　鬼虎征伐伝説とアヤゴ

先に引用した「忠導氏家譜」C部分の最後に「当島の綾語今に存す」と記されているように、宮古島には鬼虎の乱に関係する「綾語（アヤゴ）」と呼ばれる古い歌謡が伝承されている。鬼虎の乱に関係するアヤゴは、『雍正旧記』に所収されている。『雍正旧記』は、首里王府の命令で一七二七年（清・雍正五、日本・享保十二）に報告編纂されたもので、琉球の正史『中山世譜』（一七二五年成立）と同時期に成立した旧記である。次に、そのアヤゴを引用してみることにする（本文は『雍正旧記』、訳は『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』によった。便宜的に節番号をふった）。

「同人（仲宗根豊見親）八重山入の時あやこ」

一、空広か豊見親のあやことそ
（空広の豊見親のアヤゴをばしよう）
二、おきなから美御前から美御声
（沖縄から国王からの御声で）
三、空広よ宮古となめてやまれわ
（空広よ　宮古を鎮めておられるので）
四、豊見親を嶋となめてやまれは
（豊見親よ　島を鎮めておられるので）
五、我宮古む大宮古むさかやん
（わが宮古も大宮古も栄えん）
六、大八重山の下八重山の人よ
（大八重山の下八重山の人を）
七、返せ見ま戻せ見まてりいは
（返してみろ戻してみろといえば）
八、返されの戻されのねた（さ）から
（返されの戻されのできない残念さは）
九、十百その十百さの中から
（十百（千）人の十百人の中から）
一〇、手まさりやは手となめやは撰
（手勝りゃを手治めゃを選んで）
一一、大平良大むかねからやた
（大平良大御宗根〈部落〉からは）
一二、中屋かね兄の金盛とよ
（仲屋の兄なる金盛と）
一三、堀川里こむり里ならとよ
（堀川里小堀里のならと）
一四、上ひ屋里東里ならとよ
（上比屋里東里のならと）

一五、大川盛与那覇むらたらとよ
（大川盛与那覇邑の太良と）
一六、崎原の西崎のかあらもや
（崎原の西崎のカーラ〈主長〉も）
一七、すみや大つゝの主つかさと
（住屋の大頂の主司と）
一八、あれや生りほこりとの大ほちと
（あれや生まれの保久利殿大祖父と）
一九、金志川の豊見親金盛とよ
（金志川の豊見親金盛と）
二〇、城なき弟なきたつとよ
（城ナキの弟ナキタツ〈那喜太智〉と）
二一、砂川あほかめつゝの主とよ
（砂川のアフガマ頂の主と）
二二、下地生れもてやにきやもらとよ
（下地生まれのモテヤニキヤ盛と）
二三、川根のまんいりのまんきやりとよ
（川根のまん西のマンキヤリと）
二四、来間生りわりみやのとのとよ
（来間生まれのワリミヤの殿と）
二五、野崎生れ赤宇立親とよ
（野崎生まれの赤宇立親と）
二六、伊良部生れ国仲のままらとよ
（伊良部生まれの国仲のママラと）
二七、よかい生れひやちのおまのことよ
（良き生まれの比屋地のオマノコと）
二八、神まさりやいはんとのおもとよ
（神勝りゃ〈神司〉の伊安登之於母婦と）
二九、池間生れ上ましのけさとよ
（池間生まれの上増のケサと）
三〇、はなれ生れ尻の座のすんとよ
（離島生まれの尻の座のセンと）
三一、磯はなのはけ嶺のまんきやと
（磯はなの禿嶺のマンキヤと）
三二、かりまたのみなこ地のざもりやと
（狩俣のみなこ地のザモリヤと）
三三、かね屋大つゝの主つかさと
（兼屋大頂の主司と）
三四、大神生り豊見かねせとらと
（大神生まれの豊見金セトラと）
三五、土原の内原のおそろと
（土原の内原のオソロと）
三六、いくさはなほあらはなよいらへ
（戦端　穂新端を選び）
三七、大八重山ん下八重山んへやれいけは
（大八重山に下八重山に走り行けば）
三八、いくさみやをほあらみやをすせはと
（戦庭を穂新庭〈戦さ〉をしたら）
三九、あけず舞をはへら舞をさをとれ
（蜻蛉の舞を胡蝶の舞を小踊りして）
四〇、前手んな百さるきたうせは
（前手〈先鋒〉で百突きに突き倒せば）
四一、尻手んな百かなきたうすは
（尻手〈後方〉で百薙ぎに薙ぎ倒せば）

四二、与那国の嶋方んへありけいは
（与那国の島の方に走り行けば）
四三、与那国のいきはての鬼とら
（与那国の行き果ての鬼虎は）
四四、いき向ひへひ向ひ立とれ
（行き向かい走り向かい立ち向かって）
四五、空広か足なけいみやはて
（空広が足を投げだして）
四六、豊見親のひさなけいみやはて
（豊見親が足を投げだして〈構えると〉）
四七、返す見と戻す見と豊まめ
（「返してみろ戻してみろ豊見親め！」）
四八、あんやらはおわやらは鬼とら
（「そうならばこうならば鬼虎よ！」）
四九、我刀治金丸請見り
（「わが刀治金丸を受けてみろ！」と）
五〇、声掛は言とのいはにふさせ
（声掛けは言葉掛けは遅しと）
五一、鬼虎を苧ふきたけたうすわ
（鬼虎を苧ふきのように倒すと）
五二、おんつよく嶋鎮豊たれ
（武運強く　島は鎮まり鳴響んだのだ）[15]

アヤゴ（アヤグとも呼ばれる）は宮古島の歌謡で、語源は「綾言」で綾なる（美しい）言葉を意味するとされている。この「仲宗根豊見親八重山入の時（の）アヤゴ」は、玄雅が与那国島の鬼虎を征伐した時の様子を描いた英雄叙事詩としてよく知られている。

稲村賢敷氏は「このあやぐは三段からできている」とし、一～一〇節までは中山王の命により宮古各間切の精兵を選んで与那国征伐に出かけたことを述べる部分、一一～三五節までは与那国征伐に参加した者の氏名を列挙した部分、三六～五二節までは与那国島の戦争の状況を表現した部分と述べ（『宮古島庶民史』）、「これは他の「あやご」に見られるように伝説を材料として歌はれたものではなく、その当時の事実を本にして真実を伝えるために作られたものである事を語るものである」（『宮古島旧記並史歌集解』）と述べている。[16] また、宮国定徳氏はこのアヤゴについて「豊見親以下、従軍武将たちが凱旋帰島したとき、歓迎の喜びで神祭りをおこなったときにうたわれたアヤグと思われる」[17]と記している。

このアヤゴの一一～三五節には、一一・一二大平良大御宗根〈部落〉の仲屋金盛、一三堀川里小堀里のなら、一四上比屋里東里のなら、一五大川盛与那覇邑の太良、一六崎原の西崎のカーラ〈主長〉、一七住屋の大頂の主司、一八あれや生まれの保久利殿大祖父、一九金志川豊見親金盛、二〇城ナキの弟ナキタツ〈那喜太智〉、二一砂川のアフガマ頂の主、二二下地生まれのモテヤニキヤ盛、二三川根のまん西のマンキヤリ、二四来間生まれのワリミヤの殿、二五野崎生まれの赤宇立親、二六伊良部生まれの国仲のママラ、二七良き生まれの比屋地のオマノコ、二八神勝りゃ〈神司〉の伊安登之於母婦、二九池間生まれの上増のケサ、三〇離島生まれの尻の座のセン、三一磯はなの禿嶺のマンキヤ、三二狩俣のみなこ地のザモリヤ、三三兼屋大頂の主司、三四大神生まれの豊見金セトラ、三五土原の内原のオソロ、等々二十四人もの名前が述べられている。これらに一節の空広（玄雅）豊見親を加えると、実に二十五人の名前が述べてあることになる。しかも、ここに名前のある人物たちは宮古諸島のほぼ全域から参戦しており、宮古諸島における玄雅の影響力の大きさがうかがえる。離島では、二四節の来間島のワリミヤの殿、二六節の伊良部島の国仲のママラ、二九節の池間島の上増のケサ、三四節の大神島の豊見金セトラ、三五節の多良間島の土原の内原のオソロなどの名前がみえるが、彼らはそれぞれ、島を代表する有力者であったと推定される。例えば三五節の多良間島の土原の内原のオソロ

は、多良間島の土原豊見親春源のことであるが、土原豊見親春源は多良間島を統治した英雄で、多良間島では現在でも多数の関連伝説が伝承されている。[18]

先にみた「忠導氏家譜」のC部分に「精兵二十四人。其の外美女四人」とあったわけであるが、鬼虎退治に参加した全二十八人のうち二十五人もの名前が述べてあり、戦勝を喜ぶ神祭りの場で歌われたアヤゴであるというのも納得できる。「忠導氏家譜」に四人の巫女が従軍していることに注目した谷川健一氏は「巫女の呪祷の力で敵を調伏することを目指したのである。仲宗根豊見親が与那国に攻め入ったアヤゴには「あけず舞」「はべる舞」を舞い踊ったとあるが、それは巫女の調伏の舞踊を指している」[19]と述べ、三九節にある「あけず舞」「はべる（はへら）舞」は巫女の調伏の舞踊だと指摘している。

「忠導氏家譜」の鬼虎征伐の記述と「仲宗根豊見親八重山入の時（の）アヤゴ」をみることで、与那国の鬼虎征伐がどのように行われ、誰が参加したかが詳細にわかり、極めて興味深い。

Ⅳ　鬼虎の娘の伝説とアヤゴ

鬼虎に関する宮古島のアヤゴには、もう一つ有名なものがある。それが、鬼虎の娘の悲劇を歌うアヤゴである。次に、そのアヤゴを引用してみることにする（本文は『雍正旧記』、訳は『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』によった。便宜的に節番号をふった）。

「同人（仲宗根豊見親）八重山入之時嫡子仲屋の金盛豊見親捕参り候女のあやこ但鬼とらか娘」

一、耳すきかや漲水肝せ〈す〉思たおやさけ
（耳で〈噂に〉聞いている漲水　心で思っている親崎の泊よ）
二、中屋主か美御ほけんやこめ親の美御ほけん
（仲屋主のお蔭で恐れ多い親のお蔭で）
三、漲水むあは見ておやさけむあは見て
（漲水も私は見て親崎も私は見て）
四、志良か川と通ひおり寄合川と通ひおり
（しらか井〈がわ〉にぞ通いおり　寄合井にぞ通いおり）
五、白明川やむまやる寄合川やあほやと
（白明川〈すさかがわ〉は崖恐ろしい所ぞ　寄合井は穴深い所ぞ）
六、すともての川おれ明さるの川おり
（早朝の井〈かわ〉下り〈水汲み〉夜明けの井下りに（行くよ））
七、ね間座を越んな外間座う越んな
（根間座を越す時外間座を越す時には）
八、あはなけはつはふむいちよふけは泪おて
（仰向けば唾を呑んで咽びうつ向けば涙が落ちて）
九、あか八重山んおりんな下八重山んおりんな
（わたしが八重山にいた頃には下八重山にいた頃には）
一〇、あめにやちよむめやめぬ露にやちよむめやめぬ
（雨にさえも濡れてはみなかった露にさえも濡れてはみなかった）
一一、あたりことやたはりかなさことやたはかり
（そのように）寵児であったが愛〈かな〉し子であったが）
一二、川んかいはりおり水汲かそかりおれ
（それが今では）井戸に行き下り水汲みに下りるのだ）
一三、豊見親の御ほけんやこめ親の美御ほけん
（豊見親のお蔭で恐れ多い親のお蔭で）
一四、戻すふいる豊見親帰すふいるやこめ親
（戻してください豊見親よ　帰してください恐れ多い親よ）[20]

このアヤゴは鬼虎の娘が与那国から宮古島に連れてこられ、過酷な水汲みの労役を課されて故郷を思う様子が描かれている。慶世村恒任氏『宮古史伝』は、このアヤゴに「鬼虎の娘のアヤゴ」という表題をつけて引用し、さらに「可隣（憐ヵ）なる鬼虎の娘を歌ひしアヤゴ」という表題のアヤゴを引用している。[21]「可

憐なる鬼虎の娘を歌ひしアヤゴ」にうたわれた内容は「鬼虎の娘のアヤゴ」よりさらに詳細で、内室にしてやると宮古島に連れてこられたが、夫人の召使いとして過酷ないじめをうけ、ついには袖山の大木の上に登って故郷の方向を見やり自殺をとげた様子が描かれている。

実際に宮古島で調査すると、鬼虎の娘が底を打ち抜いた大桶に水を一杯に入れるように命じられていじめられる話などを聞くことができるので、鬼虎の娘の悲劇は宮古島では現在にいたるまでよく知られた伝説であることがわかる。壮絶ないじめにあって非業の死をとげた鬼虎の娘を気の毒に思う人々によってアヤゴが作られ、代々歌い継がれてきたのであろう。

次に、与那国島で採集した鬼虎の娘についての話をみてみることにする。

〈事例4〉「鬼虎と鬼虎の娘」

イソバの後にはここでは鬼虎（ウニトラ）がまた。（イソバが活躍したのは）その前。前と思うんです。十歳の時に連れて来たっていうから。十歳の男の子を、宮古はよく飢饉だったから、米と交換して連れて来た。だから、十歳の頃。それが与那国に来てから、だんだん大きくなって、背丈が一丈五寸にもなり、頭が三斗俵（さんとびょう）ほどにもなったと。背が一丈五寸とかいって。頭は三斗俵の太さ。それで鬼虎といわれたのか。

だからこの人に女の子が一人いて、それもまた人質として宮古に連れて行かれたっていうから。ああ、これだけ残しておけば、また何か残っているのにと思ったんだけど、結局は宮古に連れて行って、あれしてるわけ。宮古は雨水のないとこだったけど、浜辺に底のない桶（おけ）を置いて、

「これに雨水一杯にしたら与那国に帰す」と言われ、もう親はもう殺されて死んでいるしね。へで、帰すと言われたからもう泣きながらするけれども、底のない桶に水が満つはずなく、それを見かねた人が、底を入れてやって、やっと一杯になったら、与那国に帰っていいって言われたけれども、彼女は、もうこの、山っていっても高い山じゃないから。そこで、死んだっていう話があって。ああ、残念だなあ、与那国にでも残しておけば、何とか話が残ったのにと思っていたら、かえって宮古の唄、アヤグっていうのに、「鬼虎の娘のアヤグ」っていうのがあって、ああよかったと思って。ここでは、作品こんなに唄作る人もいなかったかもしれない。

鬼虎をやったのは、中山王。王に反国したのか何か知らないけれど、とにかくその王が、宮古の役人、仲宗根豊見親（なかそねとぅみゃ）、玄雅（げんが）、これを命じ、これ、命じてこれに、処罰させた。したら、この玄雅は、やっぱりその、宮古が鬼虎のあれでしたんでしょう。女性、金盛（かねもり）の女性三名を連れて行って、お酒も持って来て、そしたら女性たちは、鬼虎に酒を飲ませながら、

「宮古はね飢饉で今でも困っているんだよ」って。「だから自分たちもこうして来たんだ」と。「だからあんたも宮古の人間だから、考えて、つくしてくれ」って言って。ほしたらもう、あれにどんどん飲ましたら、酔っぱらったって。したときに、仲宗根豊見親玄雅ってこれ宮古市。あの、仲屋金盛（なかやかねもり）の、おねえとか。それから、その仲宗根豊見親玄雅が与那国を支配したと。その時からが、人頭税（にんとうぜい）始まったって。それは王の命令で、これを征伐した。子どもの頃から聞いていた。鬼のような顔かと。[22]

〈事例4〉は鬼虎と鬼虎の娘に関する語りである。鬼虎は宮古島から米と交換して連れて来られたこと、背丈が一丈五寸で頭が三斗俵ほどにもなったこと、鬼虎の娘は宮古島に連れて行かれて死んだことなどが語られている。ただし、〈事例4〉の話者によると、与那国には鬼虎の娘の伝説はほとんど伝承されていないそうで、鬼虎の娘のことは文献を読んで知ったということであった。実際の所、与那国島で調査すると、鬼虎の伝承そのものが薄い状況であったが、鬼虎の娘の伝承はさらに薄く、鬼虎の娘に関するまとまった話は〈事例4〉の話者から聞くことができた程度であった。「鬼虎の娘のアヤゴ（グ）」や鬼虎の娘にまつわる伝説は、鬼虎の娘が実際に非業の死をとげたとされる宮古島を中心に伝承されてきたようである。鬼虎の娘にまつわる伝説の伝承状況の点からみても、やはり与那国島における鬼虎の伝承はかなり衰微しているといえよう。

V　鬼虎征伐の時期

これまでみてきたように、仲宗根豊見親玄雅が関係した八重山征伐は、アカハチ征伐と鬼虎征伐の二度あったようである。アカハチ征伐の時期は、先に引用した「忠導氏家譜」D部分に弘治十三年庚申とあるわけであるが、『中山世譜』巻六にも明の弘治十三年庚申（一五〇〇）のことという記述があるので、問題はない。問題となるのは、鬼虎征伐の時期である。琉球の正史類には鬼虎征伐の記述はないが、「忠導氏家譜」のA部分に「嘉靖年間」（明、一五二二～一五六六）とあり、D部分に「嘉靖之初」とあることから、明の嘉靖年間の初めにあった可能性が高いと考えるのが妥当であろう。

しかし、これに関しては異論が出されている。稲村賢敷氏は「忠導氏家譜にある嘉靖年間は正徳年間の誤りであって正徳八年以前のことであると考える」[23]と述べている。稲村氏が「嘉靖年間は正徳年間の誤り」とする主たる根拠は、一つ目は嘉靖初年とすると玄雅は六十五歳前後の老齢であるから与那国征伐従軍には「少々無理な感じがする」点、二つ目は正徳八年（一五一三）に金志川豊見親那喜（幾）多津が中山で大般若経六百巻を購入して宮古島に帰島した記事が『球陽』にある点である。稲村氏は、正徳八年時に那喜多津が「金志川豊見親」と称しているので、兄金志川金盛が既に死んで家督を継いでいたとみるべきとする。そうすると、兄金志川金盛は鬼虎征伐に参加しているわけであるから、鬼虎征伐は兄金志川金盛が死ぬ前となり、正徳八年「以前のこととせねばならぬ」と述べている。

一つ目の老齢の問題は、「少々無理な感じがする」という「感想」にすぎないので、根拠とはならないであろう。二つ目の「金志川豊見親」の呼称の問題であるが、『球陽』の記事は那喜多津が「金志川豊見親」と称された人物であったことを述べているだけで、「正徳八年」時に那喜多津が「金志川豊見親」と称していたとは必ずしも読めないため、根拠とはならないように思われる。したがって、筆者は「忠導氏家譜」A部分に「嘉靖年間」、さらにD部分に「嘉靖之初」とあることからも、「嘉靖年間は正徳年間の誤り」とはみず、鬼虎征伐は通説通り明の嘉靖年間の初めにあった可能性が高いと考えておきたい。

鬼虎征伐の年代を推定するため、「忠導氏家譜」の記述を中心にして前後の事件や事項を年代順に並べると、次のようになる（「忠導氏家譜」は「家譜」と記した）。

一四七八（成化十三）尚真王即位、宮古島治金丸献上記事（中山世譜・球陽）
一五〇〇（弘治十三）**アカハチの乱**（中山世譜・球陽・家譜）
一五〇〇？（弘治年間一四八八～一五〇五）与那国攻め失敗（家譜）
一五〇〇～一五〇五（弘治年間）玄雅治金丸献上（家譜・琉球国由来記）
一五一三（正徳八）金志川那幾多津大般若経六百巻購入し宮古帰島（球陽）
一五二二（嘉靖元）玄雅治金丸王より借りる（家譜）
一五二二？（嘉靖初）**鬼虎の乱**（家譜）
一五二二？（嘉靖元）金志川金盛与那国帰島時死去（宮古嶋記事仕次）
一五二二（嘉靖元）玄雅治金丸王に返上（家譜・球陽）
一五二三（嘉靖二）玄雅金銀簪等王に賜う（球陽）

鬼虎征伐の時期を特定する場合、玄雅が尚真王に献上した宝剣「治金丸」をめぐる記事を整理すると、面白いことがわかってくる。『中山世譜』『球陽』の尚真王が即位した成化十三年（一四七八）の項に、宮古島から治金丸が献上された記事がみえるが、これは成化十三年に治金丸が献上されたということを述べているのではなく、尚真王の時代に宮古島より宝剣が献上されたことを述べようとした部分であると推定される。

弘治十三年（一五〇〇）にアカハチの乱があり、同年に与那国攻めをしようとしたが兵船が港に入ることができず失敗した（家譜Cの傍線部）。弘治年間（一四八八～一五〇五）、アカハチの乱平定の祝いのために玄雅夫妻が尚真王に朝見して宝剣治金丸を献上した（家譜・『琉球国由来記』巻二十）。これは、先に引用した「家譜」のA部分の前の箇所に「同年間（弘治年間）、為八重山平治

之慶賀、奉命玄雅夫婦朝見中山之時、献上宝剣一口称治金丸」[24]とあることから、一五〇〇～一五〇五年の出来事かと推定される。「八重山平治之慶賀」という事情から考えると、おそらく弘治十三年（一五〇〇）か、遅くとも翌年頃のことであろう。

「忠導氏家譜」によると、嘉靖元年（一五二二）に玄雅にとって大きな事件が立て続けに起こったようである。嘉靖元年（一五二二）、鬼虎征伐を命じられた玄雅は、尚真王のところに行ってアカハチ征伐後に献上した宝剣治金丸を借り、鬼虎征伐に行く。与那国征伐から帰る途中多良間島で金志川金盛死去（宮古嶋記事仕次）。鬼虎征伐に成功した玄雅は、再度尚真王のところに行って宝剣治金丸を返上した（家譜のA部分）。翌年嘉靖二年（一五二三）、玄雅は金銀簪等を王より賜う（球陽）。

嘉靖元年「壬午」（一五二二）に玄雅が治金丸を王に献上したことが『球陽』ほか複数の資料に記されていることから、最終的に治金丸が王に献上されたのは嘉靖元年（一五二二）のこととみて問題はないと推定される。

鬼虎征伐は「忠導氏家譜」C部分に「精兵二十四人。其の外美女四人」と記されているわけであるが、「大小戦船四十六隻」に「士卒三千余人」という大軍勢で征伐されたアカハチの乱とはかなり性格が異なるものだったようである。

結語

以上で、与那国島の鬼虎伝説についての筆者なりの考察を終えることとする。現在の与那国島では「買ってこられた鬼虎」（宮古島から米と交換して買ってこられた）、「鬼虎征伐」（美女の酒で酔わされ仲宗根豊見親玄雅に征伐された）、「鬼虎の最期」（アンガイハマティで玄雅らと会談しながら宴会をし、アチタブルティで殺害された）などの話が伝承されている。また、「忠導氏家譜」や「仲宗根豊見親八重山入の時（の）アヤゴ」には鬼虎征伐の状況が詳しく描かれている。宮古島や多良間島で鬼虎についての聞き取り調査をすると、鬼虎は与那国島では神様のようにあがめられているそうだという語りをよく聞くが、実際に与那国島で調査すると、鬼虎に関する関心は極めて薄く、神様のようにあがめられているということは全くなかった。さらに、与那国島には鬼虎を祀る拝所もなく、鬼虎が住んでいたところさえ伝承されていないことがわかった。

また、宮古島の古謡「鬼虎の娘のアヤゴ」や「可憐なる鬼虎の娘を歌ひしアヤゴ」には、鬼虎の娘が宮古島に連れてこられ、壮絶ないじめにあって非業の死をとげる様子がうたわれているが、与那国島では鬼虎の娘に関する伝承は衰微してほとんど聞くことができない状況になっていることがわかった。これは、アカハチと同様に琉球王府に征伐された逆賊であることに加え、鬼虎が宮古島出身で与那国島とは関係が薄く、鬼虎の娘も捕らえられて宮古島で死去して子孫もいないことも関係していると推定される。

なお、残存資料が少ないためはっきりしていない鬼虎征伐の時期に関しては、「忠導氏家譜」等の分析を通し、嘉靖元年壬午（一五二二）のこととみるのが適当と判断されることを述べた。

多良間島の土原豊見親春源は、仲宗根豊見親の鬼虎征伐に従軍して戦功をあげたことで知られているが、多良間島には鬼虎征伐をテーマとする組踊「忠臣仲宗根豊見親組」があり、毎年八月踊りで演じられている。鬼虎征伐の問題は、宮古・八重山文化圏全体の統治の問題と深くかかわっており、さらなる検討が必要であろう。

多良間島に伝わっている鬼虎征伐をテーマとする組踊「忠臣仲宗根豊見親組」の問題や与那国島のサンアイ・イソバの伝説をめぐる問題など、残された問題は今後の課題としたい。

〈注〉

(1) 伊波普猷氏他編『琉球史料叢書　第五』(井上書房・一九六二)、三五頁。

(2) 伊波普猷氏他編『琉球史料叢書　第四』(井上書房・一九六二)、四三頁。

(3) 桑江克英氏訳註『球陽』(三一書房・一九七一)、二一～二二頁。

(4) 八重山諸島の与那国島(沖縄県八重山郡与那国町)での調査は、平成十七年(二〇〇五)八月に行った。

(5) 『球陽』尚真王即位二十四年の項に「両三年間、貢ヲ絶ツテ朝セズ」(注3の『球陽』、五一頁)とある。なお、伊波普猷氏は赤蜂の反乱はイリキヤアマリを祀る祭事を禁止されたことが原因とする。伊波普猷氏『沖縄考』(『伊波普猷全集　第四巻』平凡社・一九七四、四九五～四九六頁)参照。これに対し稲村賢敷氏は『宮古島庶民史』(三一書房・一九七二)で「修史の誤謬」を指摘し、「赤蜂謀反の原因が信仰問題からきているとみるのは誤りであるとせねばならぬ」(二一四頁)と述べている。

(6) 話者は沖縄県八重山郡与那国町字与那国の西銘行雄さん(T15)。平成十七年(二〇〇五)八月二十二日・原田調査、採集稿。

(7) 話者は沖縄県八重山郡与那国町字与那国の嵩西精徳さん(S17)。平成十七年(二〇〇五)八月二十三日・原田調査、採集稿。

(8) 池間栄三氏『与那国の歴史』(私家版・第八版二〇〇三)参照。なお、与那国島のサカイ・イソバ(サンアイ・イソバ)の伝説についての詳しい考察は別稿にゆずる。

(9) 話者は沖縄県八重山郡与那国町字与那国の久部良雄幸さん(S3)。平成十七年(二〇〇五)八月二十二日・原田調査、採集稿。

(10) アンガイハマティとアチタブル(ティ)の詳しい位置や語源については、『与那国町史第一巻』与那国町役場・二〇〇二所収)、一五六～一六〇頁参照。

(11) 『平良市史　第三巻』(平良市役所・一九八一)、三三七頁。

(12) 注5の稲村賢敷氏『宮古島庶民史』第二章の七「仲宗根豊見親の統治と中山服属」の項、真境名安興氏『沖縄一千年史』(『真境名安興全集第一巻』琉球新報社・一九九三、所収)「仲宗根豊見親の事蹟」の項、ほか多数。

(13) 注11の『平良市史第三巻』、三四一～三四二頁。該当箇所の原文は以下の通り。「忠導氏家譜　正統／紀録／元祖玄雅仲宗根豊見親」の項。「童名空広天順年間生、嘉靖年間卒。(略)嘉靖年間、八重山島与那国之首長鬼虎、負己之武勇、而不随王化。故玄雅奉命、追罰之時、聖上殊賜恩借御剣治金丸。於此謝恩而帰島、率当地之兵、到干彼地方。征罰逆徒、唱凱歌、入朝而返上御剣云云。／附録／鬼虎者、勇力無双、智謀迢衆、身長一丈五寸、且与那国島之形勢、四方巌石如欹屏風、周囲有隠干瀬。而只於南方有一之津口。風波静時、稍得船出入也。若一夫守之、則万夫不得進矣。故憑其険所、遂不随王化矣。此鬼虎者、原来当地狩俣村之生産也。此人五歳之頃、身長有五尺計也。其頃当地飢饉矣。干時与那国之人、渡海干当地商売矣。見鬼虎形相不凡夫、為異之、将以米一斗買之、而帰島矣。後成人而為一島之首長也云云。弘治年間、八重山島退治之時、遣兵船令攻之。然兵船不能入津口。而空帰帆也。故今命玄雅、使討之。此時宗徒之勇士、嫡子金盛豊見親、二男祭金豊見親、三男知利真良豊見親、金志川金盛、同人弟那喜大知――是人後来称金志川豊見親――、精兵二十四人。其外美女四人、平良祝住屋大阿智城、祝砂川恋種司、伊良部伊安登之於母婦、砂川阿斌娥摩、相随既艤舟到干与那国島。先使入美人等、献諸味麹、告之曰「吾宮古島、数遭飢饉。而居民過半及憔悴矣。故投貴地、欲免飢寒之苦。而遠凌風波之難、今日幸得謁大人之台顔乎。大人原宮古島之人也。願者念故土之情、救吾等之残生矣」、涕泣而訟之。鬼虎、被惑美人巧言令色、乗酔使挽入本船也。干時鬼虎大酔而不隄防故、玄雅率兵直攻入。鬼虎振余丈之大角棒迎戦、其勇不可当。玄雅将避之欲、飛超田疇、忽然而跌倒干深田。鬼虎大笑曰「汝等今日為釜中之魚矣。奈何得飛出乎」。其声未了、自左右金盛兄弟、金志川兄弟挾之、攻戦。鬼虎当右払左大喝一声。其威猶迅雷。庶人愕然而引退。干時玄雅自田中躍出、御剣治金丸薙落鬼虎右膝也。嫡子金盛走寄、而取首。余賊悉降参、於此捕鬼虎之女子帰島云云。当島綾語存干今。」(句読点原田)。

(14) 注11の『平良市史第三巻』、三四二～三四三頁。該当箇所の原文は以下の通り。「忠導氏家譜」の「二世八重山豊見親玄数」の項。「童名祭金。成化年

間生、嘉靖年間卒。号義伯。／父玄雅。（略）／尚真王世代／弘治十三年庚申、八重山島大浜赤蜂退治之時、随父玄雅到彼地方、討治逆徒帰島。因茲奉命為八重山島守護、到彼地勤職四年。故称八重山豊見親。嘉靖之初、八重山島之内与那国之酉（酉ヵ）長鬼虎謀叛之時、随父玄雅到彼地、全成功而帰島云云。」（句読点原田）。

(15)『雍正旧記』本文と訳は外間守善氏他編『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』（角川書店・一九七八）、四〇八～四〇九頁によった。なお、『雍正旧記』本文は注11の『平良市史第三巻』、五四～五六頁も参照されたい。

(16) 注5の稲村賢敷氏『宮古島庶民史』、二二七頁。稲村賢敷氏『宮古島旧記並史歌集解』（ぺりかん社・一九七七）、四一五～四一六頁。

(17) 宮国定徳氏「仲宗根豊見親八重山入の時のアヤゴ」の項（『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社・一九八三、所収）。

(18) 原田信之「沖縄・多良間島の土原豊見親伝説」（「新見公立短期大学紀要第二六巻」（二〇〇六・12）参照。

(19) 谷川健一氏「与那国と宮古の歴史伝承の影に」（『与那国町史第一巻』与那国町役場・二〇〇二所収）、五三頁。

(20)『雍正旧記』本文と訳は外間守善氏他編『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』（角川書店・一九七八）、四〇九～四一〇頁によった。なお、『雍正旧記』本文は注11の『平良市史第三巻』、五六頁も参照されたい。

(21) 慶世村恒任氏『宮古史伝』（私家版・復刻版一九七六）、二七八～二八三頁。

(22) 話者は沖縄県八重山郡与那国町字与那国の池間苗さん（T8）。平成十七年（二〇〇五）八月二十一日・原田調査、採集稿。

(23) 注5の稲村賢敷氏『宮古島庶民史』、二二四頁。

(24) 注11の『平良市史第三巻』、三四二頁。句読点原田。

〔付記〕
本稿は、日本学術振興会平成十九年度～二十二年度科学研究費・基盤研究C・研究課題「南西諸島における文化叙事伝説の調査研究」の成果の一部である。

連絡先：原田信之　地域福祉学科
新見公立短期大学　〒七一八―八五八五　新見市西方一二六三―二

（二〇〇八年十一月十二日受理）